

MfG_J_calligraphy_and_art_in_Kina-Saffron

機那サフラン酒本舗の書画

機那サフラン酒本舗の書画については、今まで殆ど語られていないように思います。

正しい見方、鑑賞については、今後実施されるであろう長岡市の研究・評価を待ちたいと思います。

ここでは、書いた人の署名のある二幅の書について、話題を提供させていただきます。書画の関する記述は、春日の独断による感想を含んでいますが、こんな楽しみ方も許されるのでは、ということで、ご覧いただけたらと思います。

1. 機那サフラン酒本舗と石禅師

- (1) 石禅師とサフラン酒との縁、長岡との縁
- (2) 関係図

2. 新井石禅師の書

心は大山の如く 八風を受けて動ぜず …

- (1) 好んで揮毫した詩
- (2) 「八風(はっぷう)」とは
- (3) 龍樹と、著作『大智度論』
- (4) 石禅師と長岡の縁、関連図

3. 藤田東湖の書

敬天崇神

- (1) 「天」とは
- (2) 近くに北越戊辰戦争の史跡

4. 海岸防禦御用掛と藤田東湖、牧野忠雅

- (1) 海岸防禦御用掛
- (2) 藤田東湖と海岸防禦御用掛
- (3) 先任の牧野忠雅
- (4) 海岸防禦御用掛、メンバー交替と、その後

5. その他の書

6. 機那サフラン酒本舗の屏風絵、画について

- (1) 屏風絵
- (2) 棚、戸の板絵

1. 機那サフラン酒本舗と石禪師

(1) 石禪師とサフラン酒との縁、長岡との縁

サララン酒の離れの一階に、初代当主にあてた、新井石禪師の書幅があります。サララン酒には魚沼からのゲストもおられます、若いときに雲洞庵で方丈を務めた高僧として、石禪師をご存知の方も多いです。しかし下記に述べますように、長岡も、多くのご縁をいただきました。

新井石禪師は、南魚沼市雲洞庵で方丈を勤め、永平寺の住職代理などを経て、大正9年(1920年)に曹洞宗第11代管長となった、大変な高僧です。吉沢家の菩提寺の定正院は同じ曹洞宗寺院であり、当主と石禪師の交流があったでしょう。

雲洞庵(うんとうあん)は、南魚沼市雲洞に所在する曹洞宗の古刹です。本尊は釈迦牟尼仏。南魚沼郡一帯にあたる上田庄に位置、最盛期には直末27寺を有する越後有数の大寺院であったといわれています。

後に越後国主となる上杉景勝やその家臣である直江兼続が幼少期に、通天存達(第13世住職・上杉景勝の実父である長尾政景の兄)らより勉学を学んだ寺としても知られています。

山本五十六記念館の五十六の「やって見せ…」は、悠久山・堅正寺で行なわれた、住職の講義録の中にあることです。

堅正寺は、二代駒形宇太吉の発願により、座禅道場として建立されたお寺です。その二代宇太吉が、寺の完成直後、まだ入仏式が行われる前に突然亡くなります。そして宇太吉の弟、十吉氏が、二代宇太吉がはじめた銀行経営と寺院護持の双方を継ぎます。

その後、十吉氏は銀行経営に力を發揮し、長岡経済界をリードする名経営者となるとともに、美術発掘にも多大な貢献をしていくことになります。そんな十吉氏のもと、堅正寺も、戦後は、社員研修にも使用されていたところで、人材育成の極意とされる山本五十六の言葉が堅正寺住職の講義録にある由縁も、十分理解できます。 すなわち、二代宇太吉と山本五十六は、戦前の長岡中学の同期で親友であった縁から、住職と五十六も普段着で語り合うことがあったと思われます。 その話の中で、部下の育成に関して五十六さんがよく口にしていたという例の語が出て、その語句が後日に住職の講義を通じて世に広まったようです。

「堅正」という寺名が、初代宇太吉の法名からとったということを、本を読んで知りました。

1864年12月福島県伊達の生まれー1927(昭和2年)遷化

1889年(明治23年)3月、24才にして曹洞宗大学林教授。

1890年(明治23年)9月、25才にして曹洞宗大学林の学監に就任。

雲洞庵で方丈となる。同年愛知県の護国院に転住。

1920年(大正9年)12月に曹洞宗総持寺第11代管長。

(2) 関係図

新井石禪師

曹洞宗
總持寺第11代管長

サフラン酒当主 初代仁太郎 との交流

初代仁太郎と左官の伊吉が学んだアート

魚沼きっての名刹 雲洞庵の方丈 上杉景勝・直江兼続も幼少期に学ぶ

悠久山堅正寺の初代住職は 石禪師との縁

鷺の巣・定正院 サフラン酒・吉沢家の菩提寺

西福寺開山堂の雲蝶の彫刻
・「道元禪師虎を諭すの図」には龍もいる。
・サフラン酒の饅絵のテーマ性とも通じる。

鶴見・建功寺、総持寺の本山近門寺院である。

- ・曹洞宗が、永平寺・総持寺の両大本山になった経緯。
 - ・住職は、世界的な庭園デザイナーでもある枡野俊明師で、県立近代美術館の前庭現代庭園も、俊明師の作庭である。

悠久山堅正寺

新井石禪師を師とする橋本禪巖が、雲洞庵に修行僧の指導役としているとき、推挙され初代住職

二代駒形宇太吉の発願、研修道場
寺の名は初代駒形宇太吉の法名から
二代宇太吉は、長岡中央総合病院にも関与
寺の完成後、入佛前に二代宇太吉が死去、末弟の十吉氏が
寺の護持を継承

橋本禪巖講演録に、山本五十六の有名な語
「やつて見せ…」

五十九回 本堂本尊の延命地蔵菩薩は、
野本互尊翁の寄進(五十六も長岡に帰省の都度交流)

2004年の中越地震で寺院が倒壊、2006年再建

2. 新井石禅師の詩

(1) 好んで揮毫した詩

心は大山の如く 八風を受けて動ぜず
 重
 いに

人生を夢と觀すれば 悲しみもなく 苦しみもなし
 萬事を空と悟りてこそ 花もあれ実もあれ(阿連)

石禅師が初代仁太郎に書いた詩だが、この詩は多く揮毫されており、師の好きな言葉であつたらしい。

(2) 「八風(はっぷう)」など、読み方

八風については「利・衰・毀・誉・称・譏・苦・樂」という、八種類の、人を正常から異常へ、歡喜から絶望へ、善から悪へと誘う、八種類の風を言う。

生きていく中で耐えるべきものとして、龍樹の『大智度論』に示される教えにある。

人が好む姿として、

利 (うるおい)	目先の利欲にとらわれる姿
誉 (ほまれ)	我を忘れ、名聞名利にとらわれた姿。
称 (たたえ)	目の前でほめられ、浮かれてしまう姿。
樂 (たのしみ)	心身を喜ばすことに有頂天になる姿。

人が嫌う姿として、

衰 (おとろえ)	老衰や生活に破れた姿
毀 (やぶれ)	他人に批判され自己の信念を変えてしまう姿。
譏 (そしり)	本人がいるところでそしられ、怒る姿。
苦 (くるしみ)	心身を悩ますことに苦しむ姿。

これら愛憎の状態が人の心を動搖させ、惑乱を起こさせる。

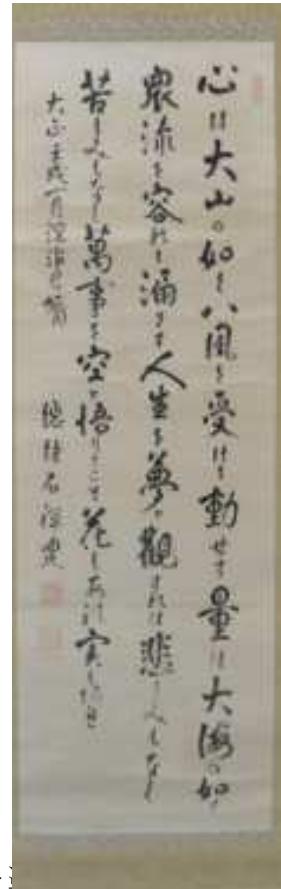
好むこと・好まないことに執着する人間の性質がその因なのである。

賢人は八風と申して八つのかぜにをかされぬを賢人と申すなり。(日蓮)
 禅語の中にも「八風吹不動」としてある。

八風吹けども動ぜず。 不動心を一言でいう句である。

量は、心に対する読みとして、「からだ」と読もうと思います。

花もあれ実もあれの「阿連」は、ガイドさせていただいた女性のゲストから教えていただいた万葉仮名



禅宗の法語は難しいことが多く、この言葉も、えてみれば難しく、且つ厳しい言葉ですが、気持ちはわかると思います。和顔愛語、先意承問などの浄土真宗の法語も、やさしいかというと、そうでもなく、やはり難しいもので

新井石禪師が、魚沼の雲洞庵に、方丈として赴任しなかつたら、きっと橋本師か長岡のお山の新規寺院に招かれることはなく、そのお寺で講演した山本五十六のことばも、世の中に知られることはなかった。奇跡である。

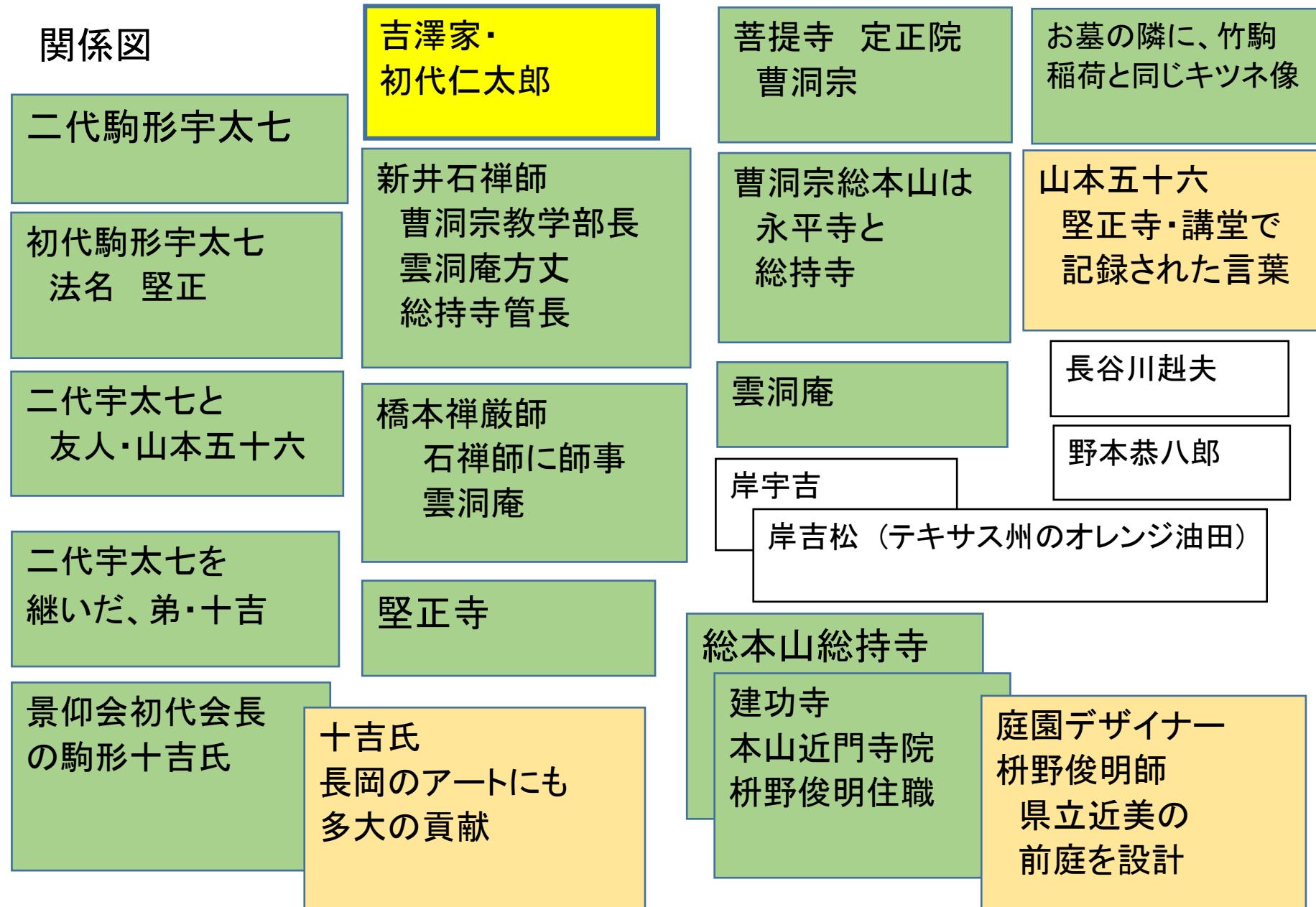
(3) 龍樹と、著作『大智度論』

龍樹は、大乗仏教中觀派の祖。2世紀に生まれたインド仏教の僧である。親鸞は龍樹を「難易二道」を明らかにしたとして、浄土真宗の七祖の一人に挙げ、主著『教行信証』の正信念仏偈に、龍樹の貢献を讃えている。浄土真宗では、その根本とされる、「信心正因」、「称名報恩」、すなわち信心が往生の正しい因で、南無阿弥陀仏の称名は報恩感謝の心で唱えるという教えも、龍樹が最初に説いたとされている。

『大智度論』とは、龍樹による、般若法典のうちの基本的な經典とされている『摩訶般若波羅蜜經』についての、膨大な注釈書である。

漢訳は鳩摩羅什(402-405年)による。

初期の仏教からインド中期仏教までの術語を詳説する形式になっており、大乗仏教の仏教百科事典として扱われることが多いという。



3. 藤田東湖の書と、東湖の略歴

機那サフラン酒本舗の離れの二階に、藤田東湖の「敬神崇儒」書があります。尊王攘夷派の若者に師と呼ばれた、東湖らしい言葉です。

(1) 「天」とは

似た言葉に、西郷隆盛が好んで使い、よく揮毫した「敬天愛人」という言葉があります。

ここで言う「天」とは、「真理」「神」「宇宙」などといった意味で、「森羅万象」や「真善美」といっても良いものだそうです。

それを敬い、それに従う。

人それぞれには、天から与えられた「天命」があり、それに従って人は生きているのである。だからこそ、人はまず天を敬うことを目的とするべきである。

(2) 近くに北越戊辰戦争の史跡

サフラン酒の離れから東に400メートル弱のところに、実質的な北越戊辰戦争の開始、開戦旗揚げの地、長岡藩本陣がおかれた光福寺という寺院があります。そして南西に2キロほどのところに。開戦決意の地として知られる前島神社があります。

ここ長岡は、江戸時代、三河以来の譜代大名牧野氏の所領でした。幕末の藩主が三代にわたり、幕府の老中となり、長く海防掛を勤めていたときもありまして、戊辰戦争では幕府側、西軍側のいずれにもつかず、「国内で争わず列強諸国の侵略に備えるべし」と、武装中立の立場を取りましたが、最期は、長岡藩に戦費調達を迫った西軍との交渉が決裂し、開戦やむなし、との事態に至りました。

藤田東湖は、安政地震で死亡しており、攘夷一色に染まっていたわけではないようですが、西軍の思想的中核をなした儒者であります。

そんな人物の書が、戊辰戦争最大の激戦地の開戦旗揚げの地の近くにあることに、不思議な感慨を覚えます。

当主の吉澤仁太郎に、どのような意図をもって東湖の書を掲げたのか、尋ねてみたかったですが、残念です。

4. 海岸防禦御用掛と藤田東湖、先任の牧野忠雅

(1) 海岸防禦御用掛(かいがんぼうぎよごようがかり)

江戸幕府の職名の一つ。通称して海防掛ともいう。

寛政4年(1792年)に設置され、当初は常設ではなかったが、弘化2年(1845年)からは常設となった。

弘化2年(1845年)、老中阿部正弘は海防掛を常設とし、阿部の他に牧野忠雅(老中)、大岡忠固(若年寄)、本多忠徳(若年寄)が任せられた。実際の運用は、勘定奉行、目付に命じられ、老中の諮問に答える形をとった。

(2) 藤田東湖と海岸防禦御用掛

藤田 東湖(ふじた とうこ)は、江戸時代末期(幕末)の水戸藩士。藩主徳川斉昭を助けて藩政改革をすすめ、尊攘派の指導者として活躍。

嘉永6年(1853年)、斉昭の幕政参与にともない幕府海防掛(海岸防禦御用掛)に任せられた。(牧野忠雅は退いた) 水戸学藤田派の学者。

文化3年3月16日(1806年5月4日) 生誕

安政2年10月2日(1855年11月11日) 江戸大地震で歿、50才。

(3) 先任の牧野忠雅 長岡藩牧野家宗家11代。第9代藩主・忠精の四男。

天保14年(1843年11月1日、老中となり海防掛担当。

嘉永6年(1853年)黒船来航後に海防掛を外れる。

安政4年(1857年9月10日、老中辞任・溜詰格

(4) 海岸防禦御用掛、メンバー交替と、その後

嘉永6年(1853年)のペリー来航に際して強化され、嘉永6年

(1853年)6月、オランダから予告されていた通り、フィルモア大統領の親書を携えたペリー艦隊が浦賀沖に来航(黒船来航)

阿部は川路聖謨と松平近直以外の海防掛を順次外し、幕臣から堀利熙、岩瀬忠震、永井尚志、大久保忠寛を抜擢した。

この人事により、海防掛は諮問機関から行政機関へと変貌し、

また開国の準備が整った。幕臣からは水野忠徳、土岐頼旨(再任)

筒井政憲、井上清直、江川英龍等も海防掛に任官している。

これら実務官僚の充実に加え、阿部は將軍を中心とした譜代大名・旗本らによる独裁体制の慣例を破り、水戸藩主徳川斉昭を海防参与に推戴した。この際水戸藩からは斉昭の腹心である戸田忠太夫・藤田東湖を同じく幕府の海岸防禦御用掛として迎えた。

徳川斉昭は海防のあり方について積極的に献策を行ったが、開国には反対であった。

安政5年(1858年)、外国奉行の設置に伴い廃止された。

5. その他の書

(1) 酒、心に満 か



三条出身の陸軍大将、鈴木荘六の書。

吉澤仁太郎に宛てた書 酒、心に満と読めそう。

(2) 全く見当がつかない



(3) 軸や表装、手紙の作者について

藤田東湖のような、当時、既に亡くなっている人の書もあるが、多くは、実際に来訪された人であると思われる。

新井石禅 曹洞宗総持寺管主

? 曹洞宗永平寺 高僧

鈴木荘六 陸軍大将

山本五十六 海軍大将、残っている手紙は海軍中将時でしょう。

初代仁太郎は 昭和16(1941)に80 才で死去しており、これらは宗教界、軍界で、自身と交流のあった人々の書と思われます。

田中角栄 後に総理となるが、大蔵大臣としての署名

1962年(昭和37年)7月 - 1965年(昭和40年)6月

第2次池田勇人内閣、第1次佐藤栄作内閣で大蔵大臣。

雪は春に溶けるからと災害に認められていなかった豪雪に田中大蔵大臣が初めて災害救助法を適用。(38豪雪)

二代仁太郎と田中角栄の交流を示すものであります。

6. 機那サフラン酒本舗の屏風絵、画について

(1) 屏風絵

サララン酒の離れには多くの大ぶりの屏風が、飾られています。主として一階には、中国風の屏風絵、二階には日本の明治・大正期の風景画と思われる屏風絵が展示されています。その大半が六曲半双屏風です。

中でも、一階に龍の屏風がありますが、いい顔をしている龍だと思います。京都の臨済宗本山寺院が多数ありますし、その法堂天井には、立派な龍が仏法の守護神として描かれています。近年も、新たに龍の図を掲げるお寺がニュースになることがあります、それらの作者は、いずれも日本画の大家が、しかも円熟期の数年をかけて描いておられます。

いささか歎服目かも知れませんが、このサフラン酒の屏風の龍も、これらの臨済宗本山寺院の新作の龍図のような、いい面構えをしているように思うのです。

(あまり上手でないと、マンガチックな龍になります。)

きっと、このサフラン酒の屏風の龍も、現代日本画の大家に匹敵する凄い技量をもった、しかるべき絵師によって描かれたに違いないと思っています。

(2) 襖、戸の板絵

一階の座敷を取り巻くケヤキ廊下の南側の奥の襖に、山水画風の板絵があります。部分的に退色していますが、きれいな部分も残っており、品のある山水です。

そして一階の中央、ケヤキの大廊下と手洗いに行く小廊下の間の板戸の両面にも、金粉を施した絵が残っています。うつかりすると見過ごしがちですが、廊下側に松の絵、小廊下側にぼたんの絵です。

松の絵は、板戸の面が東に向いており、長年にわたる大廊下のガラスを通してくる朝陽のため、退色が著しいですが、背面のぼたんの絵は、日光が当たらず退色もなく、今も鮮やかな色を保っています。

ボタンの葉は、絹本に描かれた日本画のような瑞々しさが感じられます。ボタンの花は、赤とピンクの、美しいまだら模様の花弁です、